近畿大学工学部研究報告　No.45, 2011年, pp.21-28
Research Reports of the Faculty of Engineering,
Kinki University No.45 2011, pp.21-28

地区環境に対する高齢者の評価意識に関する研究

高井　広行

Study on the Elderly People's Consciousness for the Evaluation of Local Environment in Higashi-Hiroshima City

Hiroyuki TAKAI*

synopsis

The people's consciousness for the area environment has a big difference on evaluation tendency between elderly people and other age groups.　Here, it is reported the results focused on the evaluation tendency of the elderly people's consciousness and the different tendency between them.　It was investigated by the questionnaires to the residents in Higashi-Hiroshima-City on the evaluation of the living standards and the environment, furthermore the evaluation of the life satisfaction and the important area countermeasures are analyzed in detail.

keywords: improvement of living environment, elderly people's consciousness, life satisfaction

1. はじめに

「平成の大合併」により、全国の市町村数は3,229 市町村より 1,727 市町村となり、それぞれの課題に対応したまちづくりに取り組んでいる。しかし、住民は「生活環境が悪くなった」、「住民サービスが悪くなった」、「良いとも悪いとも言えない」等の否定的な評価も多く課題が残されている。しかし、合併後は市全体としての市運営が期待されている。今回対象とした東広島市も 2005 年 2 月、1 市（西条、八本松、志和、高屋）5 町（黒瀬、福富、豊栄、河内、安芸津）が合併した。その時点での本市の住民基本台帳によると全世帯数は 69,447 世帯、総人口 174,205 人であった。2011 年現在（8 月）、全世帯数は 78,567 世帯、総人口 183,970 人と約 1 万人程度大幅に増加している発展都市と言えるが、周辺都市の人口は減少傾向にある。しかし、合併に対する各地区の思いや評価も異なっており、一体的な計画を考える場合、旧市と合併町村の環境や生活水準などについても考慮する必要がある。本研究では、東広島市を対象に生活水準や環境に対する住民の生活満足度・地区施策の重要度についてアンケート調査結果より地区の現状と問題点を明らかにし、さらに、高齢者の意識の評価の傾向について考察する。

本調査は平成 21 年度調査結果 [1)]を参考に、平成

*近畿大学工学部建築学科

Department of Architecture
Faculty of Engineering, Kinki University

22 年度に、高齢化率等の地区特性を考慮しながら調査対象地域を 4 地区選定した。西条地区は東広島市で中心市街地を保有する中心地区であり、高齢化率も 14%と低い。その他の地区（志和地区：高齢化率 32%)、(福富地区：同 36%)、(安芸津地区：同 32%)はいずれも 30%を超えている。いま、調査地区について図 1 に、また、地区の特性[2] を表 1 に示す。

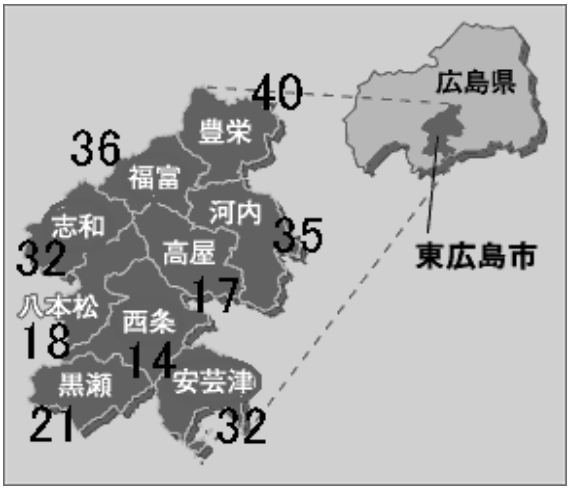

図 1　アンケート調査実施地区

表 1　東広島市の各町の地区特性

	人口	世帯数	1 世帯当	高齢化率	人口比 2011/2001
西条	66,339	300,68	2.21	13.6%	1.29
志和	7,245	2,992	2.42	31.6%	0.88
福富	2,716	1,069	2.54	35.5%	0.89
安芸津	11,001	4,429	2.48	32.3%	0.87

2．アンケート調査概要と集計結果

2.1　アンケート調査の概要と回収数

アンケートは個人属性、まちの住みやすさ、生活環境に関する満足度および地区施策の重要度について尋ねた。項目としては保健・医療・福祉関係 13 項目、産業・商業関係 9 項目、環境保全活動関係 7 項目、都市基盤関係 12 項目、教育・文化関係 12 項目、行政運営・参画関係 7 項目、生活環境関係 13 項目合計 73 項目を 5 段階で評価して頂いた。配布・回収は前述の 4 地区において 2010 年 10・11 月に行った。総配布世帯数は 850 世帯、回収率は 79%であった。なかでも志和地区は 77%と低く、安芸津地区が 83%と高かった。1 世帯当たりのアンケート票数は平均で 1.47 票である。

表 2　アンケート配布・回収状況

	配布世帯数	回収世帯数	回収票数	世帯当の票数	回収率
西条	300	236	335	1.42	78.7%
志和	200	153	205	1.34	76.5%
福富	200	174	236	1.37	87.0%
安芸津	150	125	204	1.63	83.3%
合計	850	673	980	1.47	79.2%

2.2　地区別でみた住みやすさの評価[3),4)]

いま、回答者の個人属性別の結果について地区別に図 2 から図 6 に示す。家族構成を見ると西条地区では「親と子の二世代」が 56%と他の地区と比べ高く、志和で「夫婦のみ」が 36%と高い。安芸津地区と福富地区では「親・子・孫の三世代以上」が 20%を超えている。このように都心に近いほど核家族化が進捗している様子がうかがわれる。居住年数は安芸津地区では 20 年以上が 85%と長年居住していることがわかる。西条地区では逆に 19 年以下が 62%と新しい居住者が多いことがわかる。地区の住みやすさでは「住みやすい（住みやすい+どちらかといえば住みやすい)」が「住みにくい（住みにくい+どちらかといえば住みにくい)」と答えた割合がすべての地区で上回っており、西条地区 78%、安芸津地区 71%が高い。しかし、志和地区では差はあまり見られない。住み続けたいという意識は安芸津地区が 79%と最も高く、ついで西条地区の 74%である。まちの住みやすさは若干の順位変動はあるがほぼ類似傾向となっている。合併後の変化について尋ねた結果、福富地区や志和地区、西条地区が「変らない」が 70%を超えた。安芸津地区は「住みにくくなった」が 55%と過半数を超えている。

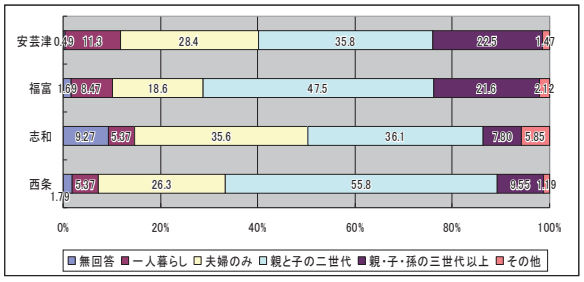

図２　家族構成

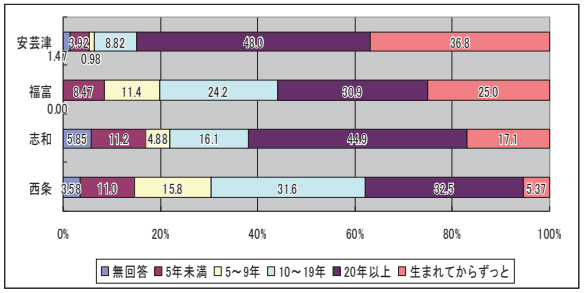

図３　居住年数

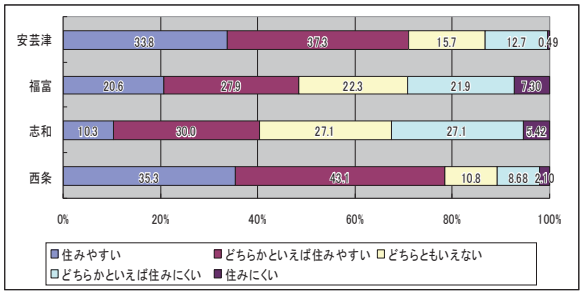

図４　住みやすさ

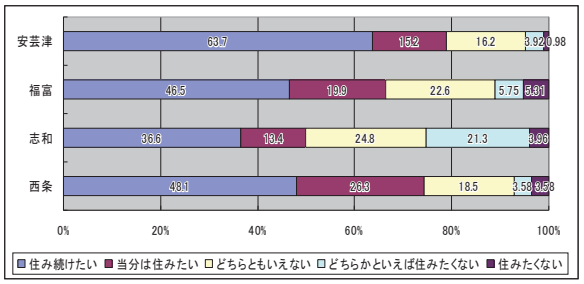

図５　定住意識

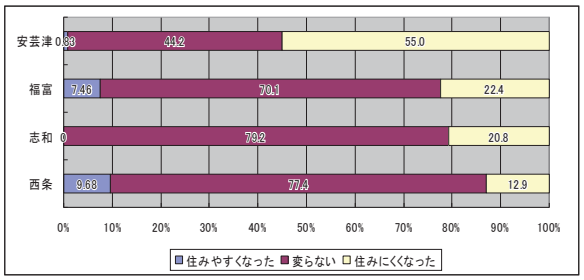

図６　合併後の変化

３．年齢別による生活満足度評価

生活満足度に関する評価について年齢別に図 7 から図 13 に示す。とくに、高齢者の評価と非高齢者の評価実態と傾向の違いについて述べる。

「保険・医療・福祉」に関して、各項目とも 20 歳代の満足度が低く、70 歳以上の満足度が高くなる項目が多い。満足度が最も高いのは、20 歳代で「夜間・休日診療（21%）」、30 歳代で「住民どうしが支えあう地域福祉活動（20%）」、40 歳代で「高齢者福祉サービス、救急医療体制（20%）」、50 歳代で「出産や子育てに関する医療・相談体制」、「夜間・休日診療」、「高齢者の生きがいづくり」や「社会参加の場の充実性」（各 15%程度）、60 歳代で「高齢者福祉サービス（17%）」、70 歳以上で「救急医療体制（41%）」となっている。高齢者は「出産や子育て」、「夜間・休日などの医療体制等」等高齢者に関する項目で満足度が高いといえる。年齢別ではこのように比較的顕著な相違がみられる。

「産業・商業」に関して、60 歳代の満足度が低く、20・40 歳代の満足度が高くなる傾向がみられる。満足度が最も高いのは、20 歳代で「飲食店の店舗数（39%）」、30 歳代で「祭り・イベント等の催し（28%）」、40 歳代で「大型店舗数（33%）」、50 歳代で「大型店舗数（25%）」、60 歳代で「大型店舗数（24%）」、70 歳以上で「祭り・イベント等の催し（29%）」となっている。この結果から大型「店舗の数」や「祭り」に関しての項目は満足度が高い。

「環境保全活動」に関して、20・50 歳代の満足度は低く、70 歳以上の満足度が高くなる傾向にある。満足度が最も高いのは、20 歳代で「ごみの減量化やリサイクル活動（23%）」、30 歳代で「田園風景の美観（34%）」、40 歳代で「田園風景の美観（29%）」、50 歳代で「ごみの減量化やリサイクル活動（24%）」、60 歳代で「ごみの減量化やリサイクル活動（31%）」、70 歳以上で「ごみの減量化やリサイクル活動（35%）」となっている。この結果から「ごみや田園風景の美観」に関しての項目で満

足度が高い。

「都市基盤」に関して、40 歳代の満足度は低く、70 歳以上の満足度は高くなる傾向にある。満足度が最も高いのは、20 歳代で「身近な公園や緑地の整備（34%）」、30 歳代で「身近な公園や緑地の整備（28%）」、40 歳代で「消防車など車両の入れる十分な幅の道路（27%）」、50 歳代で「上下水道の整備（38%）」、60 歳代で「上下水道の整備（38%）」、70 歳以上で「上下水道の整備（39%）」となっている。この結果から「道路幅員」、「歩道の歩きやすさ」、「上下水道の整備」に関しての項目で満足度が高い。

「教育・文化」に関して、50・60 歳代の満足は低く、70 歳以上の満足度は高く、若年層で低くなる傾向にある。満足度が最も高いのは、20 歳代で「学校施設の充実性、学校教育（20%）」、30 歳代で「学校教育（31%）」、40 歳代で「学校施設の充実性、学校教育（25%）」、50 歳代で「生涯学習の支援や学習機会の施設環境（17%）」、60 歳代で「学校施設の充実性（19%）」、70 歳代で「学校教育（30%）」となっている。この結果から「学校施設・教育」に関しての項目は満足度が高い。

「行政運営・参画」に関して、年齢層別には満足度の差はそれほどみられない。満足度が最も高いのは、20 歳代で「地域資源を生かしたまちづくり（20%）」、30 歳代で「窓口サービス（22%）」、40 歳代で「窓口サービス（23%）」、50 歳代で「窓口サービス（24%）」、60 歳代で「窓口サービス（27%）」、70 歳以上で「窓口サービス（35%）」となっている。この結果から「窓口サービス」や「行政運営」に関しての項目は満足度が高い。

「生活環境」に関して、20・50 歳代の満足度は低く、70 歳以上の満足度は高くなる傾向にある。満足度が最も高いのは、20 歳代で「騒音、振動、悪臭等の公害の少なさ（45%）」、30 歳代で「日当たりなどの周辺環境の良さ（50%）」、40 歳代「日当たりなどの周辺環境の良さ（48%）」、50 歳代「日当たりなどの周辺環境の良さ（44%）」、60 歳代で「日当たりなどの周辺環境の良さ（56%）」、70 歳以上で「日当たりなどの周辺環境の良さ（59%）」となっている。この結果から「自宅周辺環境の良さ」、「救急体制」、「公害対策」に関しての項目で満足度が高い。

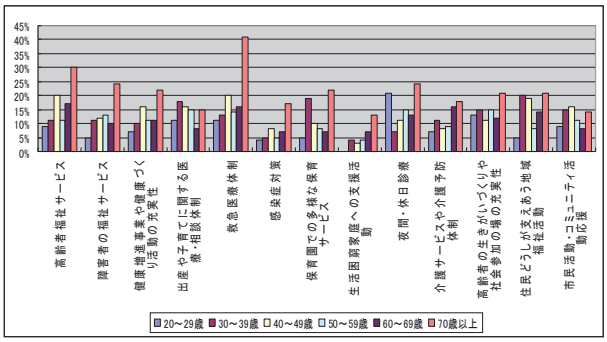

図 7　保険・医療・福祉（満足度）

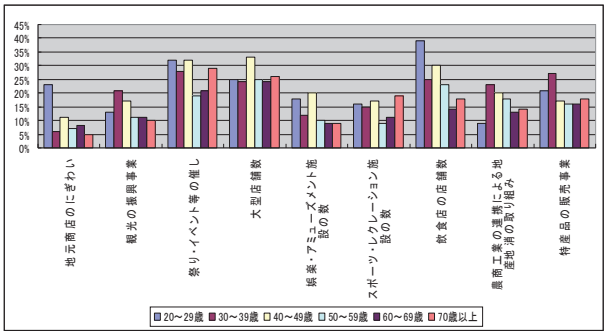

図 8　産業・商業（満足度）

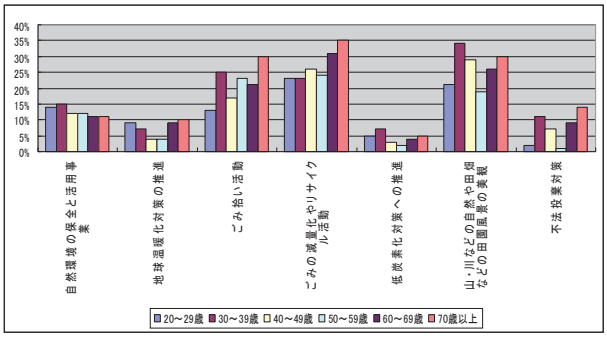

図 9　環境保全活動（満足度）

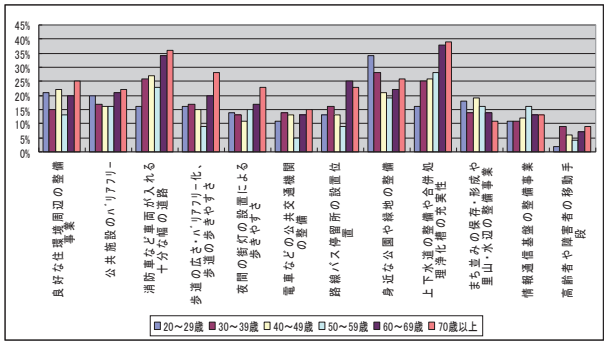

図 10　都市基盤（満足度）

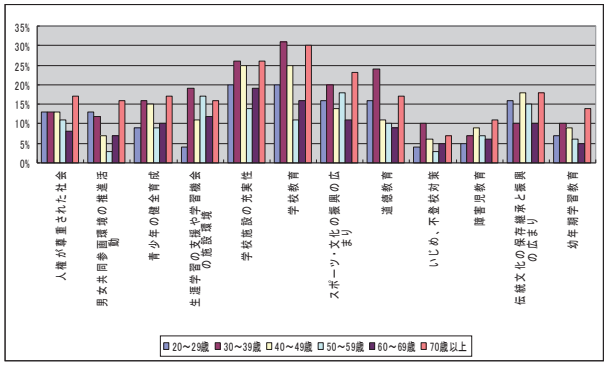

図 11　教育・文化（満足度）

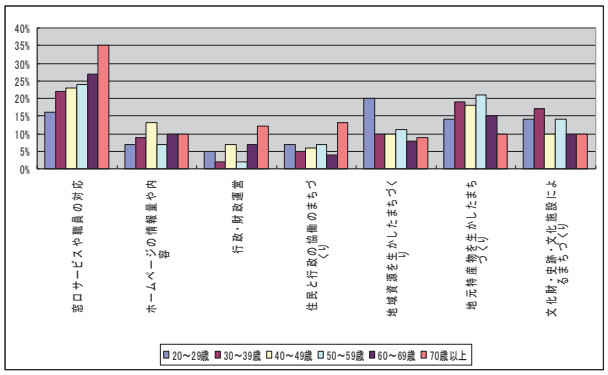

図 12　行政運営・参画（満足度）

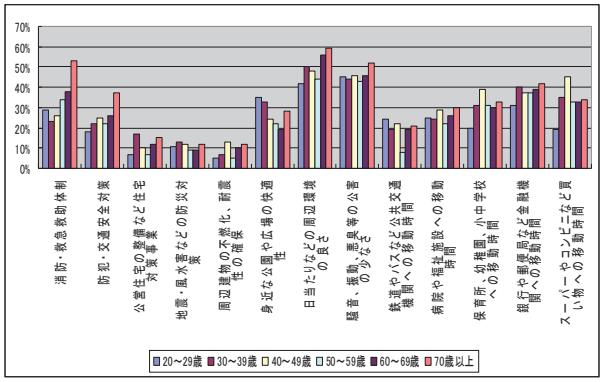

図 13　生活環境（満足度）

4．年齢別による施策の重要度評価

対象地域における各施策の重要度について年齢別に図 14 から図 20 に示す。満足度に比べ全体的に訴える割合が高く、とくに、50 歳代に高い評価項目が多い。

「保健・医療・福祉」に関して、20 歳代が指摘する重要度が低く、70 歳以上の重要度が高くなる傾向にある。重要度が最も高いのは 20 歳代で「出産や子育てに関する医療・相談体制（88%）」、30 歳代で「出産や子育てに関する医療・相談体制（85%）」、40 歳代で「救急医療体制（90%）」、50 歳代で「高齢者福祉サービス、救急医療体制（82%）」、60 歳代で「救急医療体制（87%）」、70 歳以上で「夜間・休日診療（84%）」となっている。この結果から高齢者にとって「健康づくり」、「夜間・休日などの医療体制」が重要だとわかる。

「産業・商業」に関して、それほどの差はみられない。重要度が最も高いのは 20 歳代で「祭り・イベント等の催し（69%）」、30 歳代で「地元商店のにぎわい（62%）」、40 歳代で「地元商店のにぎわい（65%）」、50 歳代で「地元商店のにぎわい（64%）」、60 歳代で「地元商店のにぎわい（65%）」、70 歳以上で「地元商店のにぎわい（67%）」となっている。この結果から「地元商店のにぎわい」が重要であることがわかる。

「環境保全活動」に関して、20 歳代の重要度が低く、50 歳代の重要度が最も高くなる傾向にある。重要度が最も高いのは 20 歳代で「ごみの減量化やリサイクル活動（55%）」、30 歳代で「不法投棄対策（73%）」、40 歳代で「ごみの減量化やリサイクル活動（70%）」、50 歳代で「ごみの減量化やリサイクル活動、田園風景の美観、不法投棄対策（73%）」、60 歳代で「不法投棄対策（77%）」、70 歳代「不法投棄対策（79%）」となっている。この結果から「ごみの減量化」や「不法投棄対策」が重要だとわかる。

「都市基盤」に関して、20 歳代の重要度が低く、

50 歳代の重要度が最も高くなる傾向にある。重要度が最も高いのは 20 歳代で「夜間の街灯の設置による歩きやすさ（76%）」、30 歳代で「夜間の街灯の設置による歩きやすさ（79%）」、40 歳代で「歩道の広さ・バリアフリー化、歩道の歩きやすさ（83%）」、50 歳代で「夜間の街灯の設置による歩きやすさ（85%）」、60 歳代で「夜間の街灯の設置による歩きやすさ（78%）」、70 歳代で「夜間の街灯の設置による歩きやすさ（82%）」となっている。この結果から「歩道の広さ」や「街灯の整備」が重要だとわかる。

「教育・文化」に関して、年齢層別には重要度の差はみられない。重要度が最も高いのは 20 歳代で「学校教育（76％）」、30 歳代で「学校教育（79%）」、40 歳代「「学校教育（78%）」、50 歳代で「「学校教育（72%）」、60 歳代で「「学校教育、いじめ・不登校対策（62%）」、70 歳以上で「道徳教育（67%）」となっている。この結果から「道徳・学校教育」が重要だとわかる。

「行政運営・参画」に関して、20 歳代の重要度が低く、50 歳代の重要度が高くなる傾向にある。重要度が最も高いのは 20 歳代で「窓口サービス（55%）」、30 歳代で「窓口サービス（62%）」、40 歳代で「窓口サービス（63%）」、50 歳代で「地元特産物をいかしたまちづくり（66%）」、60 歳代で「窓口サービス（65%）」、70 歳以上で「窓口サービス（69%）」となっている。この結果から「職員の窓口サービスや対応」、「地元特産・資源をいかしたまちづくり」が重要だとわかる。

「生活環境」に関して、年齢層別には重要度の差はみられない。重要度が最も高いのは 20 歳代で「消防・救急救助体制、防犯・交通安全対策（76％）」、30 歳代で「消防・救急救助体制（82％）」、40 歳代で「防犯・交通安全対策（83%）」、50 歳代で「消防・救急救助体制、防犯・交通安全対策（89%）」、60 歳代で「消防・救急救助体制（85%）」、70 歳以上で「防犯・交通安全対策（89%）」となっている。この結果から「消防・救急救助体制」、「防犯・交通安全対策」が重要だとわかる。

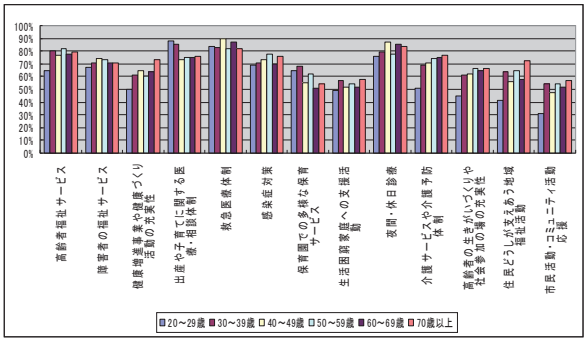

図 14　保険・医療・福祉（重要度）

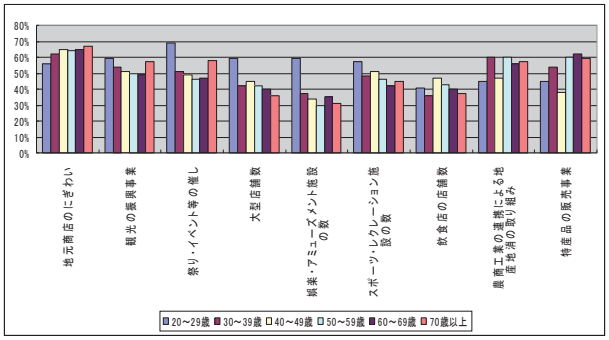

図 15　産業・商業（重要度）

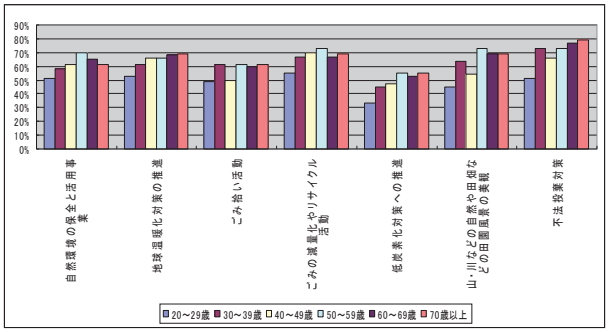

図 16　環境保全活動（重要度）

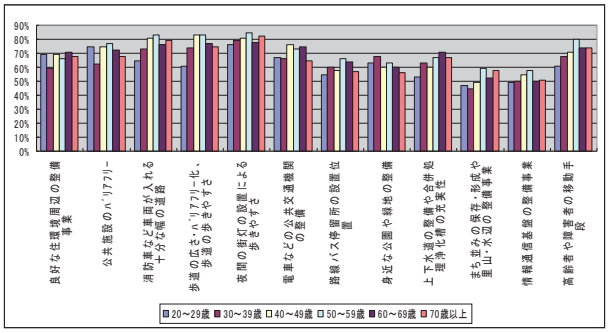

図 17　都市基盤（重要度）

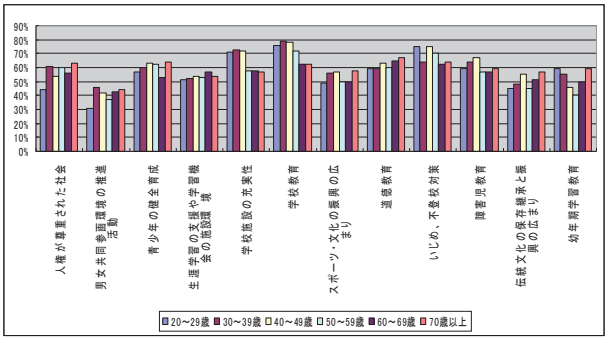

図 18　教育・文化（重要度）

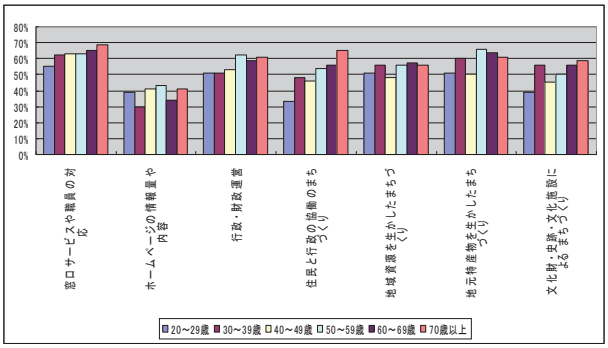

図 19　行政運営・参画（重要度）

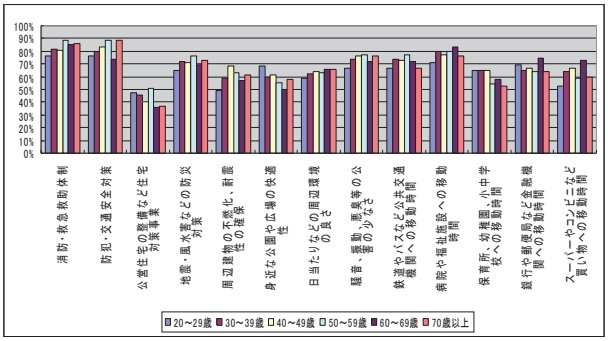

図 20　生活環境（重要度）

5．防災に関する高齢者の意識

1995 年（平成 7 年）1 月 17 日午前 5 時 46 分に発生した兵庫県南部地震における死者の内訳は、兵庫県内 6,402 名（99.5%）・兵庫県外（大阪府、京都府など）32 名（0.5%）。死因は建物の倒壊、家具や家電品の下敷きによる圧死、窒息死などで 84%、火災等で 15%。犠牲者の過半数が 65 歳以上の高齢者であった。また、2011 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分に発生した東日本大震災（9 月 6 日現在）死者数は 15,769 人、行方不明者数は 4,227 人で、合計は 19,996 人となっている。死者の内訳は男性 5,971 人、女性 7,036 人。死因は水死が大半を占め 93%、圧死・損傷死： 4%、火災による焼死： 1%で、死因不明者は 2%であった。年齢別にみると 80 歳以上 22%、70 － 79 歳 24%、60 － 69 歳 19%、9 歳以下や 10 歳代、20 歳代はいずれも 4%以下であった。このように、両地震を見ても、かなり特徴的であり、特に死因および死者数に相違がみられる。しかし、高齢者の被害が他の年齢層に比べ圧倒的に高くなっているのは共通している。

そこで、過去の調査（2009 年東広島市内調査）結果を用いて防災に対する高齢者の意識について若干報告する。いま、年齢別の防災に関する意識結果を表 3 に示す。

「自宅での火災発生に対する不安」では非高齢者の割合が高齢者を上回っている。しかし、「延焼不安」については 10%ほど高齢者が高い。「避難場所の認知状況、安全性、安全な避難」は高齢者の意識が上回っている。「地震発生の可能性」やその他の項目については非高齢者が高い。このように、高齢者の防災の危機意識は高齢者より非高齢者のほうが強いようにみられるが、避難場所や家具の転倒防止、話し合い等の具体的な取り組みについては経験豊かな高齢者のほうが上回っている。このことから見ても高齢者の危険・不安意識については他の年齢層に比べやや防災意識が低く現れている。このことから、災害時には若年層を中心として被害が少しでも減少させるためのコミュニティの形成が望まれる。

6．まとめ

年齢別による生活満足度評価では全体的には 50 歳代の人々の不満が高い。「保険・医療・福祉」に関して 20 歳代の満足度が最も低く 8%、70 歳以上が 22%と最も高い。「産業・商業」に関して 60 歳代の満足度が 14%と最も低く、20・40 歳代が 22%と最も高い。「環境保全活動」に関して、20・

表３　年齢別防災意識　　（%）

地　　区	65 歳未満	65 歳以上
自宅での火災発生の不安を感じる	59.8	55.5
自宅への延焼不安を感じる	38.3	48.7
避難場所を知っている	53.7	70.5
避難場所は安全である	46.7	48.3
避難場所へ安全に避難できる	32.8	37.7
30 年以内に地震が発生すると思う	23.5	19.1
家具の転倒防止対策をしている	12.3	16.9
119 番通報の経験あり	30.3	38.1
救急活動の総合的に満足	34.4	36.4
家庭内での災害の話し合い有り	57.9	70.0
総合的な防災環境評価（良い）	10.4	14.5

50 歳代の満足度が 12%と最も低く、70 歳以上が 19%最も高い。「都市基盤」に関して 40 歳代の満足度は 14%と最も低く、70 歳以上が 23%と最も高い。「教育・文化」に関して 50・60 歳代の満足度は 10%と最も低く、70 歳以上が 18%と高い。「行政運営・参画」に関して、年齢層別には満足度の差はみられない。「生活環境」に関して 20・50 歳代の満足度は 24%と最も低く、70 歳以上は 33%と最も高い。これらの満足度から見ると殆どの項目について他の年齢層に比べ満足度が高いという結果となっている。

施策の重要度評価は 20 歳代で低く、50 歳代で高い傾向がみられた。「保健・医療・福祉」に関して 20 歳代の重要度が低く、70 歳以上が高くなっている。「産業・商業」に関して年齢層別には重要度の差はみられない。「環境保全活動」に関して 20 歳代の重要度が低く、50 歳代で高い。「都市基盤」に関して 20 歳代の重要度が低く、50 歳代で高い。「教育・文化」に関して、年齢層別には重要度の差はみられないが比較的高い割合で訴えている。「行政運営・参画」に関して 20 歳代の重要度が低く、50 歳代で高くなっている。「生活環境」に関して年齢層別には重要度の差はみられない。

防災意識に関しては高齢者の危険・不安意識については他の年齢層に比べやや防災意識が低く現れている。このことから、災害時には若年層を中心として被害が少しでも減少させるためのコミュニティの形成が望まれる。

このように、年齢層により評価する項目も違っており、生活上、関係のある事柄や実施してほしい事柄について顕著に表れているといえよう。このことから、地区の計画や対策を考える場合、その地区の居住者の構成を考慮して進める必要がある。今後、高齢者の意識構造について詳細に分析し、高齢者社会におけるまちづくり施策についてきめ細かく検討を加えていく必要がある。

最後に、本アンケート調査に協力頂いた皆様に紙面をお借りして感謝の意を表します。

＜参考文献＞

1）高井広行、合併市町村における生活満足度・重要度評価からみた地区環境総合評価に関する研究、近畿大学工学部研究報告、N0.44、平成 22 年 12 月
2）東広島市、統計でみる東広島市、2011 年 7 月
3）高井広行、合併町村における生活水準・満足度評価に関する研究、日本福祉のまちづくり学会、平成 22 年度大会、（刈谷）pp1-4、2010 年 8 月
4）高井広行、高齢者の地区環境評価意識に関する考察、日本福祉のまちづくり学会、平成 23 年度大会、（堺）pp1-4、2011 年 8 月